

田村泰次郎と青春——『大学』を読む

梶 川 忠

TAMURA Taiziro et Jeunesse—Une lecture de *Daigaku*

Tadashi KAJIKAWA

TAMURA Taiziro est un écrivain mal connu. Il a eu la notoriété dans le monde littéraire après la seconde guerre mondiale et a disparu vingt ans après. Les moeurs confuses l'a accepté et l'ordre rétabli l'a nié : c'est-à-dire que le temps l'a balloté. Dans cet essai nous en recherchons l'essence dans le premier roman d'avant-guerre.

田村泰次郎と青春——『大学』を読む

梶川 忠

第二次大戦後「肉体の門」をひっさげて一躍流行作家になったせいとか、田村泰次郎（明治四十四年十一月〜昭和五十八年十一月）は戦後突然小説を書きだしたように思われているかもしれない。だが彼の処女作は、第二早稲田高等学院に在学していた、昭和五年十二月の「挑戦」（「東京派」）であり、文壇的処女作も昭和九年四月の「新潮」に掲載された「選手」であって、決して一夜明けたら流行児になっていたわけではない。

田村泰次郎自身「かうしてみると、その間にいろんな屈曲はあつたが、二十年近くも、ともかく小説を書いてゐるかと思ふと、ちよつとへんな気持ちになる。そんな年月をつひやしても、まだいまの程度のものしか書けないかと思ふと、自己嫌悪の気持ちに陥るのだ」と最初のはやすぎる自選集「女性男性」1)の「あとがき」に記しているくらいなのである。それに田村の代表作といわれる「肉体の門」、**「肉体の悪魔」**2)などで、戦争によってそれまでの人生を歪められてしまった男女が登場するように、田村自身昭和十五年に中国大陸へ一兵士として従軍していらい七年間（十五年十一月〜二十一年二月）、つねに死と向かいあわせの生活を送っていたのである。流行作家となった彼の「日本の女に七年間の貸しがある」3)という放言も、裏には自分の自由にならなかつた人生を惜しむ無念がうかがえる。

そんな田村の作家的資質を探るには、だから戦後まもなくの諸作品はむしろ不適當というべきであろう。また戦後という時代の特長性がある。現在からふりかえれば生活の苦しさと対照的に奇妙なくらい明るい時代

であった。たとえば石坂洋次郎の新聞小説「青い山脈」「山のかなたに」4)などにみられる、新しいものはすべて善、古いものはすべて悪とわきり、田舎の旧陋は若者によって打破され、それで大人は目覚めるといったパターンが典型である。また別の例。田宮虎彦の自伝的な小説「足摺岬」「絵本」5)などに描かれた戦前の青春は、まるで戦前という言葉には「暗黒の」という枕詞がついているかのように、アプリオリに暗いのである。

さらに戦前の修行時代にこそ作家の原質があらわれているはずである。もっとも彼の戦前に修行という名を付すのはよくないかもしれない。処女作を発表するや、他の学生作家たちの注目を集め、順調に作家生活を歩んでいたからである。だが新進作家にはなっていたものの、「いつのまに自分が文壇へでたのか」6)と言うように、むしろまだ不安定な位置しかしめていなかったもので、とりあえずは修行時代と呼んでおこう。

そんな田村の戦前の諸作品の中で、拙論では「大学」（初出は「人民文庫」昭和十一年七月〜十一月、昭和十二年一月未完、後半を書き足して昭和十四年十一月二十九日東亞公論社より発行）を取り上げることにする。短篇には若書きというべきものが多く、特に注目したい作品がないこと、また「田村氏を書きたいのは氏の全身的意欲をぶつつけた長篇にあり、また氏の作家的様相は長篇においてこそ全面的に發揮されるであらう」7)と十返舎も記しているように、長篇向きの作家（ただし骨太では決してない）だからである。

この最初の、そして戦前では唯一の完成した長篇小説である「大学」

は、「後記」によれば、「私自身大学の予科へ入学した年である昭和四年から、同五年までの一時期の大学を、その中で佐田信吾といふ一人の学生の心理的なもの、またさういふことが出来るならば思想的なもの、発展過程をとほしてみつめ」（同書二九三ページ）8）ることを意図している。これを主人公に語らせてみよう。

（・・・）思想といふものは、さういふやうに自分の無内容を自分自身に見せつける場合と共に、その「自分」といふものはほかからおしつけられたものでなく、どこまでも自主的に戦ひとつたものが何よりも本当のものであつて、いざといふときに自己を生かすのにも、防衛するのにも一番役だつのはさういふ「自分」ではなからうかと考へられる。何にしても、すこしでも早く自分で自主的に、自分の思想を持つた「自分」をつくらねばならぬ。これから一生懸命に勉強せねばならぬと、佐田は心にいひ聞かせた。（一二四）

（一）

長篇『大学』は、戦後にも美和書房から昭和二十二年に刊行されているが、例えば第一巻に収録されるはずだった『田村泰次郎選集』（全六巻・昭和五十四年冬・泰流社）は、結局一冊も刊行されずにおわつてしまったので、現在では手軽に読めない作品になっている。そこで初めに梗概を記しておきたい。

昭和四年に主人公の佐田信吾が大学予科に入学した頃、学内は雄弁会解散問題でゆれてた。大学当局の解散をめざす動きを支持する右翼学生と、それに反対する左翼学生との間で、一触即発の状態にあつ

た。佐田は心情的に左翼の側にいるものの、田舎者の気遅れからただの傍観者の立場にいる。

そんなある夕方、学校から下宿へ帰ろうとする佐田は、今まで口を利いたことのない、仏語クラスの同級生中根貞光と知り合い、誘われるままに酒をのむ。中根は政治問題にはまったく関心をもたず、自己紹介の時に「女の貞操の貞」（三一）というように、女に屈託している。情痴の世界に耽溺している男である。料理屋の仲居をしている愛人の不貞をつねに疑い、すきあらば女を折檻しようとする。しかし実際には自分に自信がなく、女に見捨てられるのを恐れるあまり、酒がはいると居丈高になるのである。そして女の店につれていかれた佐田は、中根がへらへら笑いをうかべたり、号泣したり、隠しもつた短刀で殺そうとしたりする修羅場を見物する羽目になる（第一章）。

翌日の教室で、佐田は長谷川のアジ演説に感激する。広島の高等学校を赤の運動で退校になった長谷川は、党员ではないものの左翼運動に深入りしている。そんな人間が田舎者を奮い立たせるのは簡単なことであるが、しかし心情と行動は別物である。一步踏み出そうとするものの、佐田はどうしても集会に参加する勇気がわかなかつた。「人生の理想的な姿への熱情」（六六）が体内に生じるのを覚えてはいるが、まだそれに取り憑かれるまでにはいたらない（第二章）。

佐田の在学していた中学出身者で、この大学に学ぶものたちの同窓会である。くだらない話に興じ、民謡を踊ったりする先輩たちに不審をいだき、ある先輩を佐田は詰問する。政治的に「自分の信念に生きる」（一一三）立場を支持しつつある佐田は、人生の先輩にその立場を補強してもらいたいのである。だが「赤の学生が勝手に騒いでいる」（一一〇）という認識しか先輩は示さない。先輩たちに失望するとともに、自己の信念が世の中の大義ではないことも知らされる。多くの学生はノンポリなのである（第三章）

夜長谷川と散歩していた佐田は、左翼運動に従事している世岡夏子（女子大学英文科学生）と出会い、紹介される。大きな目で真正面から射すくめる夏子に魅きつけられる。積極的な夏子はその晩佐田の下宿にやってくるが、佐田には手をだす決心がつかない（第四章）。

夏休みで帰郷した佐田は父と語るうちに、大学は「最も権威ある最高学府」（一四六）という世間の認識とずれてしまった自分をみつめる（第五章）。

二回目の出会いは、野球ゲームを擬装した政治集会の場である。半分は政治的なものと予感しつつも、長谷川に誘われて野球をするつもりだった佐田は、警察に追われる。しかし夏子の機転で恋人を装い虎口を脱したふたりは、そのまま女の下宿へゆき、肉体的に結ばれる。そして、「人間が思想の奴隷になつてゐる」（一七四）という共通認識をいだし、ふたりは政治運動に対する嫌悪をみせる（第六章）。

夏子と離れられなくなった佐田は、毎日のように交渉を重ねるが、しかし結婚は見知らぬ純潔な女性とするものと考えている。一方で長谷川と疎遠になるにつれ、佐田は仏文の四人の友人たちと酒をのみながら、文学論をたたかわすようになる。そして学年末、進級の出来なかったクラスメートの中に、政治運動家長谷川や情痴に生きる中根の名前があった（第七章）。

中根とは異なり、自分たちは理想的な男女関係にあると考える佐田に、突然転換がやってくる。夏子が昔のある事件の嫌疑で留置され、何人もの男と関係のあったことがわかる。そんな夏子を憎み、それゆえにいっそう執着する（第八章）。

夏休みという冷却期間をおいたものの、上京した佐田は夏子の肉体を忘れられない。不潔な女と嫌悪し、そのイメージを消すために夏子に溺れる。中根とおなじく愛欲の世界の住人になる。そんな自分を厭い、酒に救いをもとめる（第九章）。

佐田の文学仲間の岡伊作は「紅雀」という喫茶店の少女住恵にほれている。やっとある夜、小心の岡は結婚したい旨をつける。翌晩返事をもらう岡に佐田は同行する。ところがプレイボーイと抱擁している住恵に出くわしてしまふ。岡は「自分で自分を不幸な方へおしやるやうに出来てゐる、因果な人間」（二三六）である。ちょうどその頃おこった学生運動で、デモ隊の先頭にたつて本部へ突入してしまふ（第九章）。

除籍された岡は故郷の北海道へ帰ってしまう。その原因となった住恵をなじろうと、佐田は「紅雀」から女を連れ出す。しとやかな女というイメージを裏切るほどに、「好きでもない人に、思はせぶりな態度をとる」（二五二）ことはできないと強く反論する女に、それを認めつつも佐田は平手をくわせてしまふ。その夜佐田は住恵と肉体関係をもってしまう。友人を拒絶した女が自分をあっさりと受け入れたことで、身勝手にも佐田は女一般に不信感をいだく。そしてそんな女の肉体から離れられない自分を嫌悪する（第十章）。

新宿の裏通りで顔みしりの学生に出会い、ふたりで酒をのむ。この男は悪魔の憑依によって小説を書くこうとしている。ペンを走らせるのは自分ではなく、悪魔が自分の手を使って書いていると信じている。中根のように「人間の中の何かを執念深く追つかけまはしてゐる」（二七一）男である。そして中根の時よりもずっとそういう類の男に親近感を覚える。だが佐田自身は明晰でありたいと願っているので、魅かれながらも対立する（第十一章）。

房総半島を旅行する。大学への、自分への幻滅からである。雄大な自然やたくましい海女や灯台守たちに接するうちに、佐田はすべてを受け入れようという気になってくる。女たちとの関係は決して醜いものではない。大学とは「自分たちの内部にあるのだ。俺たちが、大学なのだ」（二九一）という大きな肯定の世界にはいる（第十二章）。

このように要約してみると、昭和の三四郎といったおもむきがあるのだが、実際には「三四郎」における漱石ほどの余裕は、田村にはない。登場人物は、三四郎を取り巻く知識人、インテリ、都会人などの多彩な人物ではなく、佐田と同じ田舎者ばかりである。だから「大学」は単色の世界であり、二十六歳の田村に漱石の突き放しを期待してはなるまい。つまり佐田は、執筆する田村の数年前の自己像であり、文学仲間のひとり小幡久一は詩人の河田誠一をモデルとしている。

それでは二十年程前までの学生にみられた、大人への通過儀礼としての「政治」「女」という二点でこの作品を読んでみたい。

(II)

まず「政治」について。穴蔵から初めて地上にでてきた動物のような主人公は、あらゆるものに興味をいだく。中学時代には柔道に明け暮れていた佐田は、特に政治思想面にはげしい関心をもっている。

彼はまず感情的に「紋付の学生」(六三)に嫌悪を覚える。そして感情的にすぎないことも自覚している。「たしかな理論の体系に裏づけられた、思想の上での反発ではないことは明らかである。何故なら佐田は、「思想といへるやうな確信のある理論の組立てを、まだほとんど自分の中に持つてゐないからだ。」(同右)

だからといって謙虚に理論体系を身につけるべく努力するには、大学はさわがしすぎる。むしろ右翼の学生の粗暴さが、ひたすら進歩的學生への共鳴をいだかせるのである。だから右翼の學生が乱暴をはたらく時

結局、佐田は、自分がある場合には熱情のおもむくままに恐ろしいほど矯激な考へを抱いたり、また別の場合には、自分ながらいらだたしいまでに要心深い態度をとったりする人間であることをみとめるのであつた。(・・・)だから、本當をいへば、もしさういふ切迫した場面に直面しても、自分がどういふ態度に出るか、佐田自身にも予断をゆるさないものがあるのだ。(六五)

そしてそのように考えるにいたつた自分に、佐田は身震いを覚える。人生の階梯をひとつのぼつたように思えるのである。「人間の、あるひはもつと大きく人生の理想的な姿への熱情といつたものが、次第に強く自分に憑いて来るのを、はつきりと意識することが出来た。」(六六)

左翼思想は佐田にとって、学問研究の対象でも、政治行動でも、ありうべき理想社会像でもなく、ひたすら憧れの対象である。左翼思想の中に生き、多くの左翼学生とともに歩めば、それによって彼の人格的、人間的成長の保証される宗教になっている。

だが研鑽とは無縁である。例えば禊によって肉体的清浄をたもつなどは無論せず、教義の学習、分析、解釈などの精神的いとなみも必要なのである。ただすがって生きれば成長できると信じている。

「自分の信念に生き」(一一三)ているはずの左翼學生が、接触をふかめるにつれ、決して人間的な成長をとげつつあるのではなく、実際には組織の奴隷になっているのがわかる。そしてわかるとすぐに佐田は、阿片吸引からさめたように、あっさりと左翼から別れるのである。

彼はその気持の変化を自分でも不思議に思ふのだつたが、一体どうしたといふのだらうと考へてみた。(・・・)問題はさういふ進歩的學生たちのやり方にあるやうに思ふのである。(・・・)さういふやうにそのときどきの機会を一つものがさず、巧みに行はれるのだが、

佐田には何だかその水ももらさない巧みさがあまりに理に落ちてゐるやうで、人間的な味わひにとほしいやうな気がするのだ。(一五二)

進歩的学生の対局にあるノンポリ学生は、「麻雀や球つきに耽つてゐた。喫茶店へ出かける者や、中には酒を飲んで夜遅く帰る者もゐた。(一五三) 下宿の女中をからかひ、女の話をしてゐた。」(一五三) こんな学生に佐田は同調する気はないけれど、また非人間的な政治学生にもついてゆけないのである。(警察に代表される強圧的な国家権力に対する反発と恐怖もほのみえる)

そしてこの思いを決定的にするのが、笹岡夏子である。第七章での秘密の政治集会の後、夏子の下宿へいったふたりは互いの左翼思想を確認しあう。目にもえない指導部の指令に唯々諾々と従つてしまふ左翼学生への嫌悪を共有しているのがわかる。

(III)

「人間のための思想でしょ、思想のための人間ぢやないわ」

「いまの場合は、思想が人間をほつぱりだして、自分だけ勝手に威張り散らしてゐるときですわね」

「人間が思想の奴隷になつてゐるんだわ」

「みんながその奴隷根性になつてゐるんですわね」

「それが本当の救はれぬプロレタリアよ」(一七四)

一歩どころか半歩も踏みこんでいない左翼思想からあっさりと身を引くための、これは言い訳であるにすぎない。自己との対話によってこれを考察していたなら、これほど簡単に離れられはしないだろう。たまたま似た気分になっていたふたりが、互いを知つたからすばやくできたのである。

だからふたりは後ろめたさはもたない。「転向」という言葉がもつた

場の変化もない。元来観念的に思想を深めてゆくタイプでもなく、激情にかられて行動するタイプでもない以上、ひとり下宿にこもつて思想的営為にいそしむのでもなく、退校覚悟で運動にのめりこむのでもない。

ただ少々首をつつこんだ世界に危険をかぎとり、動物的な本能が働いたかのように、首をひっこめたにすぎない。しかも夏子は留置場に一晚とめられたこともあるのに、佐田は警察のリストにもならないのである。あるいは新しいおもちゃがみつかったといおうか。つまりちょうど左翼思想へのうたがいのきざしかけた頃に、夏子への欲望がはげしくなり、するとうまく夏子が手に入ったので、未練なく左翼から離れることができたのである。

「政治」の面で、長谷川からののはたらきかけによって加わるうとしたのと同様に、「女」についても佐田は決して積極的ではない。女から言い寄られて、初めて決断をくだそうとするのである。

夏子の場合には、すでにかなり感じとつていた好意を、女の言葉とまなざしが佐田に実感させる。

「ねえ、さうなさんない、いつかの夜はあたしがとめていただいたんですもの、今日はあなたがおとまりになる番よ」

夏子は例の濡れてゐるやうな大きな眼で、じつと佐田をみつめた。(一七五)

初めて会った日に、自分の下宿に押しかけてきて、一晚泊まった女である。田舎者の気おくれからか、童貞の気よわさからか、その夜は接触

を避けたものの、彼女を抱きたい気持ちがつよくなる一方であった時である。そしてこの夜さらに身を遠ざけたなら、夏子が男を拒否することになるだろう。

それを切っかけに毎日ふたりが逢うにつれ、佐田はうぬぼれを抱くにいたる。中根貞光のように嫉妬に狂って女を追いまわす情痴の世界に沈むのでもなく、他の学生のように安直に娼婦を買う（佐田の友人たちは、だれかの下宿で酒をのんだ後、新宿の遊廓に繰り出す習慣である）のでもなく、灘の大きなつくり酒屋の娘で女子学生という、他人のうらやむ素人娘と関係をもてたからである。

もちろん佐田には客観的にふたりをみる余裕はない。ただ女の積極的な行為にひきずられるように、女との接触を重ねるだけである。

だから女に没頭する佐田は、夏子と本当の恋愛状態にあると確信する。自分の女を「一番気質のあふ理想の女性」（一八六）と信じるにいたる。性欲発散の対象としての女と接するのでもなく、女と頽廢への道をあゆむのでもなく、互いに理解しあい、いたわりあい、人間的な成長をふたりして遂げつつあると考える。ふたりの間には嫉妬や不信や口論や隠しごとはなく、永遠に無欠な宥和を生きっていると、楽天的にも佐田は思うのである。

有頂天になった主人公佐田が、なぜそういう女が自分のような田舎者に積極的になったのか、自省しないのはありうることである。だが作者の田村までが、いかに主人公に近い位置にいたとはいえ、魅力的な女に我を忘れてしまうのは、稚拙であろう。もちろん、自己の政治信念に従って生きている、と最初はみえた政治青年が、実は思想の奴隷であったように、住田も愛欲の奴隷にすぎないことを後に描きはする。だが、最初の出会いの不自然さは最後までたたり、田舎者佐田には一目惚れをされる魅力はないというべきであろう。

夏子の過去が、思想取り締まりの警官によって唐突に暴露される。何

人もの政治学生と関係があったというのである。相手の人格、人間性に対する好意から肉体的にも結ばれるのではなく、主義主張ゆえに接触するのは、夏子が思想の奴隷であったことを意味する。都会での人間的な成長を願っている佐田にとって、男との人間的なむすびつきなら、夏子をもとめることができたであろう。いくらふたりで左翼学生への嫌悪を確認したうえで関係ができたにせよ、佐田は夏子の過去を許すことができないのである。

留置場からでてきた夏子がさらにいかりを駆りたてる。「夏子の類は、これが一晚あんなところですが、来て女かと思はれるほど、いい血色をしてゐた。」（一九五）女の卑屈な態度が火に油をそそぐ。

「何をって、あたしのいままでのこと」

「ああ、聞いたよ、（・・・）」

瞬間、夏子は呼吸をのんだやうになつたが、やがてそつといつた。

「もうきらひになつた、あたしを」（・・・）」

「ねえ、きらひになつたんでせう」

さういつて、夏子は佐田の顔を覗きこんだ。

「うるさいな」（・・・）」

「ねえ、だけど、あたし、あなたを知つてからは真面目だったのよ」

（一九六—八）

こうして夏子が自分以外の男を知っているからこそ（佐田は夏子しか知らない）、よけいに佐田は女に溺れてしまう。夏子から離れたいと願いつつ、いっそう夏子に執着するようになる。いわば愛欲の無間地獄に、佐田の意識では、のめりこむのである。

しかも中根貞光が嫉妬の対象にするのは、仲居をしている女房の客である。女房の傍らにいる客を、勝手に浮気の相手ときめつけられる。佐

田は、たとえ夏子に男の名前を白状させても、まぼろしにむけて嫉妬するようなものである。刃物をふりまわす中根の行動に、どこか女と馴れ合ったものがあつたのに比べ、佐田は内向せざるをえない。「佐田は夏子の間に目方が二貫目減つた。夏中故郷で夏子のことで苦しんだからだ。」(一九九)そして二度とあわない決意をして東京にもどつたものの、夏子をもとめずにいられず、関係を復活すればしたでさらに苦しんでしまふ。「何か汚いものが二人の關係にまじつて来てゐるやうに思はれた。その汚いものの感じをすこしの間でも忘れるためには、爬虫のやうな陶醉のほかにはなかつた。」(二〇〇)

天使の地位を滑りおちた夏子も、佐田の汚れがひどくなるにつれ、積極的な明るさは消え、ますますかげを帯びるようになる。あれほど向日的であつた夏子から笑みは失われ、ふたりは「日かげの蛇のやうに暗い生活にはいつて行つた。」(同右)のである。そして「若者らしい艶々しい血色は消え失せて、初老の人に見えるやうなしよぼしよぼした眼つきや、脂気をなくした皮膚」(二〇六)をもつた人間になつてしまふ。だがひとつの救いが佐田にはある。夏子と出会い、理想の伴侶をみつけたつもりでいた頃にさえ、結婚を意識しなかつたことである。もちろん処女を妻に迎えたいという男の身勝手はあつた。しかし夏子との付き合いは、制度的なむすびつきにはふさわしくないように感じられたのである。だからうかつに結婚という言葉をはかなかつた自分に、わずかなぐさめを見出すことができたのである。

「政治」ではほとんど足をぬらさずにすんだけれど、「女」では完全に蟻地獄にはまりこんでしまったことになる。だが少しの同情も佐田には必要ない。表面的にはまったく対照的な振る舞いをして、向かう方向では似ており、しかも悲劇を迎える友人がいるからである。

酔えばかならず女を買いにゆく文学グループの中で、佐田と岡のふたりは決して遊廓に足をふみいれない。最初は恋愛、後には情痴というべ

き夏子との關係に心を奪われている佐田に対し、岡は喫茶店「紅雀」の少女住恵にプラトニックな思慕を寄せている。「彼女は俺のケティだよ」(二一九)と住恵に対する思いを、友人たちには打ち明けているのに、本人には一言も利けない純情な男なのである。

夏子が「豊かな筋肉の大柄な身体や、ねっとり潤んだ白い皮膚」(一三五—六)の、現在では失われてしまった朗らかで潑刺としたインテリ女であるのと同じく、住恵も「近代的の顔だちと、華やかな物腰と、インテリらしい感じのする話しぶり」(二一八)の、明るい十八歳である。人目をひくと同時に、その華やかさはおとなしい青年を気おくれさせる。だから岡のようにおどおどと黙つてみつめるだけの男には、一顧だにくだらないのである。

そして結果は、(I)の要約に記したとおりのだが、岡はいわば佐田と対照的な存在に設定されている。「政治」に関しては、女と知り合う前の佐田が半歩踏みこんだだけで無縁になるのに対して、「自分で自分を不幸な方へおしやるやうに出来てゐる、因果な人間」(二三六)である岡は、女にふられて自棄をおこし、自己破壊の衝動にかられるままに、友人も驚くほど過激な政治行動をとつてしまふのである。

「女」に関しては、愛欲の修羅道に落ちこんだ佐田に対して、岡はいつも臆病に近づくことさえようしない。女からの接近によって、佐田が政治から女への方向を辿り、しかもそれを乗り越える望みを与えるのに比べ、女から政治への過程を、女から無視されたせいで辿つた岡は、政治行動によって破壊する。つまり上昇すべく東京の大学にはいったのに、都落ちをすること、人生の道程から一歩おちてしまふのである。

住恵と關係をもつことで、夏子から離れられることを佐田は期待した。肉体的にしか結びつかない男女は、本当の恋愛關係にない。そう考える佐田には、夏子は恋人ではないのである。

しかもやすやすと身体を許した住恵を、それゆえに佐田は信じられな

い。自分にむける好意はうたがわれないものの、恋愛小説のヒロインのように精神的な愛にみちあふれてはいないのである。理想の女性を空想する佐田は、互いに尊敬しあい、その結果肉体的にもむすびつく（あるいは岡のように、現実的接点のない夢想的恋愛を生きているのではなく、精神的なむすびつきのみでいる）関係を望ましく思っているのに、夏子や住恵を目の前にすると言目的な衝動にかられてしまう。そして簡単に自分を受け入れてしまう女を嫌悪し、肉欲にとらわれた自分に悩む。だが一方では彼女たちの肉体の魅力には抗しがたく、女たちが佐田の欲望を拒否してくれることを願いつつ、それでも実際にはそんな女は絶対に認められない。自分や女の現在を容認できず、ありうべき自分、ありうべき男女関係がどこかにあると考えてしまう。しかしそれを希求する行動とは無縁の佐田であった。

若い佐田の考へでは、人間が人間を愛するといふことは、こんな精神的な要素のすくないつながりをいふのではないやうに思はれる。もつとお互ひに尊敬の気持を相手に持つことの出来る愛こそ、理想の愛といふのではあるまいか。いまの自分の彼女たちへの気持は、さういふ意味で正当な愛ではなく、単に肉体的な欲望に根ざしてゐるだけのものなのではなからうか。（二五八）

肉欲だけの女である夏子や住恵と別れてすぐにも、彼女らの裸体やそのしなやかな動きを反芻してしまふ佐田であり、そんな自分を責めていたある夕方、女たちとは正反對の、理想の愛の境地に共にいけそうな少女たちをみかける。

その窓のところには三人ほどの若い女たちが腰かけて、何かしきりとたのしげに話してゐる情景が眼にうつつた。彼女たちは恐らく夏子

と同じ学校の生徒たちだらうが、恰度逆光線になつてゐるので橙色の光りに隈どられ、その姿は西洋の名画の中にあるあの荘嚴なまでのきらびやかさにかがやいてゐた。

まるで彼女たちの一人一人が円光につつまれたマリアのやうであつた。（二六一）

娘たちのいる二階を地上にいる佐田が見上げてゐるやうに、このふたつの位置の間には、すでにくっきりと越えがたい線がひかれてゐるやうに思えるのである。夏子たちを知る以前の佐田ならば、二階の純粋な世界に何のためらいもなく溶けこんだかもしれない。だが今の佐田の内面には、一步を踏み出すのを罰するものがあつた。すでに汚れてしまつた佐田には禁忌の聖域なのである。

いつの間にか自分には、さういふやうに立派なものを避けようとする卑屈な精神が、これほど強く自分を支配してゐるのであらうか。すると自分にはもう美しいものを美しいものとして正視する能力さへないのか。（・・・）さう思ふと、佐田は自分が魂の眼をふさがれた盲目のやうに思はれた。（二六二）

もう人間的に成長するという向日性は期待できない佐田であつた。本来第一級の人物たるべき自分をつくるために上京したのに、道をそれて、むしろ墮落の谷間から一生抜け出せないやうに思われるのである。

(IV)

佐田の女性ゆえの悩みは、いつの時代の青年にもあることであるとい

えるかもしれない。旺盛な性欲に色情狂ではないかと悩み、その一方で僧侶の禁欲にあこがれ、スポーツに汗をながすといった類のことである。しかしこれは男自身の問題であり、現実のある女から引きおこされるものではない。

昭和戦前の学生は佐田と同じではなかった。性欲と清浄との間で揺れうごいたとしても、彼らの相手をつとめるのは、娼婦、女給、ダンサーなどのプロの女性であった。性欲はプロで解消し、たとえば郷里の許婚者とは結婚するまで肉体関係をもたない。つまり二種類の女性が社会的に区別されて、彼らの目の前にあったのである。

だから己の性欲を制御しがたい悩みはあっても、ただ生活費にこまる男でも、そういう類の金はなんとか捻出できたものである、女性の行為のせいで自己の精神が乱されることは、あまりなかったのではないか。

最初佐田は恋の勝利者であった。下宿を頻々と訪れる夏子の美しさに、他の住人や女中たちはざわめいた。露骨に佐田を羨望する住人もいた。

もちろんそれほど魅力的な男ではない佐田が、どうして惚れられるのかは不明だが、主人公だからという理由で納得しておくことにしよう。精神も肉体もゆたかな女性をえて、佐田が有頂天になるのも無理はない。そしてそれゆえに佐田の苦悩は生じる。性欲だけを切り離し、安直な手段で解消している他の男たち（たとえば佐田の文学友達）が、しようと思ってもできない苦悩なのである。

序章で引用した田村の「後記」にあった「思想的なものの発展過程」は、作者自身「思想」を政治思想、左翼思想の意味で使用している以上、小説内で少しもみられないけれど、「心理的」発展過程は描けているといえるだろう。

といったもたとえば破戒僧などにみられる規律を犯した苦悩ではなく、もっと気分的なものであるという点で、いかにも日本的といえるのだが、しかし一方では離れるに離れられない男女関係を、夫婦という制度的に

むすびついてしまった場ではなく、常に切れる可能性のある場で描ききったことは、田村の手柄といえる。

もっとも性欲がすぎるから、発散の場をいつも確保しておきたく、だから夏子や住恵を手放せないという側面がないわけではない。そしてこう書くときの「肉体文学」の巨匠である田村が、すでに戦前から色濃くあらわれていたと主張したいように思われるかもしれないが、決してそうではない。

精神的にも肉体的にもまるごと女性を愛するというのは、一応の男女平等が確立された現在でも、そう多くはあるまい。まして戦前である。政治的同志として知り合った男女が肉体的にむすばれると、共産党のいわゆるハウスキーパーのように、性をともなった女中に女がなってしまうケースもあった。

だから田村は賢明にも彼らを政治とは無縁にし、他に何の制約もない裸の男女に設定しているのである。そういう男にとって、政治的に男と関係をもっていた女の過去が暴露されるということは、女がハウスキーパーであったか、数人の男としか書いてないので明らかではないが、同時期に複数の男のなぐさみものであった可能性もある。それゆえの男の苦悩なのである。政治を見捨てた女に走った男が、政治から復讐されるとでもいおうか。

あるいは置置場から解放された夏子が、男の顔いろをうかがわなかったなら、佐田の苦悩はなかったかもしれないが、この点は作者が触れていない以上、論じても仕方あるまい。

若書きだから稚拙な面は多々あるけれど、女の過去ゆえに悩む青年を精一杯描いたという点で、『大学』は評価されてしかるべきであろう。そしてこの路線を追求していたなら（戦場体験の問題は棚上げしたうえで）、単なる風俗作家として忘却されることもなかったであろうが、うらむべきは深みが欠けていることである。もう一步描写すべきと思われる

るのに、ふっと身をかわしてしまうのである。

第十二章で佐田に救いを与えてしまうのも、そうである。もちろん自然主義の作家のようにことさらに傷つける必要はないが、大いなる自然にいささか触れただけで解消されるほど、佐田の苦悩はいいかげんものではなかったからである。

それが若さのせいか才能のせいかはまだわからない。

(註)

- 1) 田村泰次郎「女体男体」(昭和二三年二月・報文社) P三〇一
- 2) 「肉体の門」は昭和二二年三月「群像」掲載
「肉体の悪魔」は昭和二二年九月「世界文化」掲載
- 3) 田村泰次郎「わが文壇青春記」(昭和三八年三月・新潮社) P二〇八
- 4) 「青い山脈」は昭和二二年六月九日より十月四日まで「朝日新聞」に連載
「山のかなたに」は昭和二四年六月十五日より十二月九日まで「読売新聞」に連載
- 5) 「足摺岬」は昭和二四年十月「人間」掲載
「絵本」は昭和二五年六月「世界」掲載
- 6) 前掲「わが文壇青春記」P三九
- 7) 前掲「女体男体」収録の「田村泰次郎・人と作品」P二九八
- 8) 「大学」からの引用は、以下ページ数のみを記す。

受理 平成2年3月20日